

## 「旅するヒズル」——イクバルのウルドゥー詩(1)——

松村 耕光\* 訳

### はじめに

本稿は、行動主義、反帝国主義、反資本主義、そしてムスリムの連帯を唱えて大きな思想的影響を与えたインドの詩人ムハンマド・イクバル(Muhammad Iqbal, 1877-1938)のウルドゥー詩「旅するヒズル(*Khizr-e Rāh*)」の全訳である。11連より成り、詩人が発した、人生、専制政治、資本家と労働者、イスラーム世界の状況に関する質問にヒズルが答えるという内容の本作品は、ヒズルの答えの中にイクバル思想の核心が鮮明かつ簡潔に表現された、イクバルの代表作の一つである。

本作品は、1922年4月16日、ラホールで開催された、イスラーム擁護協会(Anjuman-e Hīmayat-e Islām)第37回年次大会でイクバル本人によって詠まれ、後に多少変更されて、第1部に西欧留学以前の詩、第2部に1905年から1908年までの西欧留学中の詩、第3部に帰国後の詩を収めた、イクバルの文学・思想の変化の跡を辿ることのできる興味深い第一ウルドゥー詩集『鈴の音(*Bāng-e Darā*, 1924年出版)』に収められた(この翻訳は『鈴の音』のテキストに基づいて行った)。詩集の題名になっている「鈴の音」とは、隊商の駱駝が付けている鈴の音のことで、駱駝が立ち上がるときに鈴が放つ音の意味で用いられており、出発の合図という含意があるとされている。

イクバルの生涯と主要著作を年譜の形で簡単に紹介しておく。詩人・哲学者と称されることが多いが、政治的な活動も行っている点に注意しなければならないと思われる。

1877年 パンジャブのシアルコート(Sialkot)に生まれる(11月9日)

\* 1873年12月29日生まれとする説もあるが、パキスタンでは、1877年11月9日がイクバルの生年月日とされている。

1898年 ガヴァメント・カレッジ(ラホール)より学士号を取得

1899年 ガヴァメント・カレッジ(ラホール)より修士号を取得

1905年 西欧(イギリスおよびドイツ)留学

1907年 ケンブリッジ大学で学士号を取得

ミュンヘン大学に博士論文“The Development of Metaphysics in Persia”を提出し、博士号を取得

1908年 弁護士資格取得

帰国

1915年 詩集『自我の秘密(*Asrār-e Khūdī*, ペルシア語)』出版

1918年 詩集『滅私の秘義(*Rumūz-e Bē-khūdī*, ペルシア語)』出版

1923年 詩集『東洋のメッセージ(*Payām-e Mashriq*, ペルシア語)』出版

Sirの称号を授与される

---

\* 大阪大学世界言語研究センター 准教授

- 1924年 詩集『鈴の音 (*Bāng-e Darā*、ウルドゥー語)』出版
- 1926年 パンジャーブ州立法議員に選出される
- 1927年 詩集『ペルシアの讚美歌 (*Zabūr-e 'Ajam*、ペルシア語)』出版
- 1929年 南インド講演旅行
- 1930年 講演集 *Six Lectures on the Reconstruction of Religious Thought in Islam* 出版 (1934年に増補版が *The Reconstruction of Religious Thought in Islam* という題名で出版される)  
ムスリム連盟アラハーバード大会の議長を務め、議長演説でインド・ムスリムの独立国家構想を提示する (12月29日)
- 1931年 第2回円卓会議 (ロンドン) に出席
- 1932年 詩集『永遠の書 (*Jāvid-nāmah*、ペルシア語)』出版  
第3回円卓会議 (ロンドン) に出席
- 1933年 アフガニスタン旅行
- 1934年 詩集『旅人 (*Musāfir*、ペルシア語)』出版
- 1935年 詩集『天使ガブリエルの翼 (*Bāl-e Jibrīl*、ウルドゥー語)』出版
- 1936年 詩集『さて何をなすべきか、おお、東洋の諸民族よ (*Pas cheh bāyad kard, ae aqwām-e sharq*、ペルシア語)』出版  
詩集『モーセの一撃 (*Zarb-e Kalīm*、ウルドゥー語)』出版
- 1938年 ラホールの自宅で死去 (4月21日)  
詩集『ヒジャーズの贈り物 (*Armughān-e Hijāz*、ペルシア語・ウルドゥー語)』出版

イクバルはパンジャーブ語地域で生まれ、パンジャーブ州の州都ラホールを生活の拠点としていたが、ペルシア語とウルドゥー語によって詩作した。人生の目的とはイスラームの教えによって自我を強化し、この世における神の代理人となることである、という自我哲学を主題とする「自我の秘密」と「滅私の秘義」、そしてルーミー (Rūmī, 1207-1273) に導かれて詩人が天界を旅するという内容の、ダンテの『神曲』を思わせる「永遠の書」の三大長篇詩はペルシア語で書かれているが、イクバルはウルドゥー語でも思想性豊かな傑作を数多く生み出している。今回、イクバルのウルドゥー詩を紹介する機会を与えられたので、彼の代表作とされるウルドゥー詩を順次、翻訳・紹介していきたいと思う。

イクバルのウルドゥー詩には、いくつかの作品を除いて、ペルシア語的な表現が非常に多く見られ、時として、ペルシア語で半句 (1行) や詩句 (2行) が書かれている。この「旅するヒズル」でもペルシア語の半句や詩句が現れるが、煩雑になるので、註では特に指摘しなかった。また、この詩で用いられている脚韻や反復語 (句) ——従来の古典詩の規範からは多少逸脱した形で用いられている——は、翻訳においては特に考慮しなかった。尚、いずれの連でも、伝統的なアラビア韻律の一つであるラマル (ramal) 韻律の変化形 (fā'ilātun fā'ilātun fā'ilātun fā'ilun 長短長長 / 長短長長 / 長短長長 / 長短長) が用いられている。

## 「旅するヒズル」<sup>1)</sup>

詩人

或る夜、私は川辺に佇み、景色に酔い痴れていた  
心の片隅に懊悩の世界を秘めて  
夜は静かで、風は風ぎ、川は穏やかに流れていた  
川なのか、川の写し絵なのか解らないほどであった  
揺り籠で乳飲み子が眠るかのように  
うねる波は川底深くまどろんでいた  
夜の魔力によって鳥は巢に捕われ  
か細い光の星々は月の魔術に捕われていた  
すると突如、世界を旅するあのヒズルが現れたのだった  
老齢にもかかわらず、朝日のような青春の輝きを放つヒズルが<sup>2)</sup>  
私にこう言うのだった——「おお、始源の秘密を求める者よ  
心の眼が開けば、世界の運命が明らかとなろう」  
この言葉を聞いて心に激しい動揺が生じ  
探求に身を捧げる私はこう口を開いたのだった

あなたの炯眼には嵐が見えているのです  
その猛威はまだ水中で静かに眠っていますが  
『貧者の小舟』、『清らかな命』、『孤児の壁』……  
博識のモーセですら、あなたの前では驚くばかり<sup>3)</sup>  
人里を離れ、あなたは砂漠を巡るのです  
あなたには、昼も夜も、明日も昨日もないのです  
人生の秘密とは何なののでしょうか、専制政治とは何なののでしょうか  
資本と労働との争いとは一体何なののでしょうか<sup>4)</sup>  
アジア古来の服は裂け  
新興民族の若者たちは、着飾っているのです  
アレクサンダー大王は生命の水を得られませんでした  
彼の魂は今尚酒宴に興じているのです<sup>5)</sup>  
ハーシム家の者たちは、選ばれた御方の教えの名誉を売り払い  
不屈のトルコ人たちは滅亡の危機に瀕しているのです<sup>6)</sup>

- 
- 1) ヒズル (Khizr) は、神の使者で、生命の水を飲み、不死となったとされる伝説上の人物。緑色の衣を纏い、いつも旅をしており、道に迷った人を助ける。
  - 2) ヒズルは老人の姿をしているとされる。
  - 3) コーラン 18 章 60-82 節を参照。
  - 4) 通常、「帝国」と訳される単語 *salṭanat* を「専制政治」と訳した。
  - 5) アレクサンダー大王は生命の水が湧き出る泉にヒズルの案内で出かけたが、生命の水を飲むことができなかったという伝説がある（ヒズルは生命の水を飲み、不死となった）。ここでは、専制君主の象徴的存在として言及されている。
  - 6) メッカの首長であったフサインが、第1次大戦の折、オスマン・トルコに対して叛乱を起こし、独立したことを指している。「選ばれた御方」とはイスラームの預言者ムハンマドのこと。

火が燃え、アブラハムの子孫がいて、ニムロデがいるのは  
再び誰かが誰かを試みようとしているからでしょうか<sup>7)</sup>

### ヒズルの答え

#### 砂漠の旅

私が砂漠を旅することに何故おまえは驚くのか  
    不断の歩みこそ生きていることの証ではないか  
おお、屋内に座す者よ、見たことがないのか  
    砂漠に出発の鈴音<sup>すずおと</sup>が鳴り響く光景を  
悠然と砂丘を歩く鹿の歩きぶりを  
    身一つで休み、里程標のない旅を続けるのを  
暁に素早く動く星が現れ出るのを  
    天空に天使ガブリエルの額が現れ出るのを  
静かな夕暮の砂漠に太陽が沈むのを  
    ——この光景を見て「神の友」アブラハムの慧眼は輝きを増したのであった<sup>8)</sup>  
おまえは隊商の姿を見たことがないのか  
    信仰深き人々が天国のサルサビールの泉で憩うかのように泉で憩っているのを<sup>9)</sup>  
恋の狂気は新しい砂漠を求めるのに  
    おまえは町にいて、農地と果樹園に縛られている<sup>10)</sup>  
不断に回し飲みされることによって命の杯<sup>さかずき</sup>は強固となる  
    無知な者よ、これこそが生命不滅の秘密である

#### 人生

人生は損得勘定を超えている  
    人生とは、生きることであり、命を捧げることである  
人生を「今日」、「明日」の物差しで測ってはならぬ  
    人生は永遠であり、とどまることがなく、常に若々しい  
世界を自ら創造せよ、もし命があるならば  
    人生とはアダム<sup>アダム</sup>の秘密、「あれ、とのみ言い給えば、その通りになる」の核心<sup>11)</sup>

7) ニムロデは自分を神と認めないアブラハムを火に投じさせたが、神の助けによってアブラハムは火傷一つ負わなかった、という伝説がある。コーラン2章258節、29章24節、21章68-69節を参照。

8) 太陽が沈むのを見て、アブラハムが太陽崇拝をやめたことを指している。コーラン6章78節を参照。アブラハムが「神の友」と呼ばれることに関しては、コーラン4章125節を参照。

9) サルサビール(Salsabil)は、天国にある泉の名前(コーラン76章を参照)。

10) 恋の狂人は町を出て砂漠に住みつく、というイメージがある。ニザミー(岡田恵美子・訳)、『ライラとマジジューン』、平凡社、1981年、を参照。

11) 「あれ、とのみ言い給えば、その通りになる」=世界創造のこと。コーラン2章117節を参照。

人生の真理を「山を穿つ者」の心に尋ねるがよい  
人生とは乳の河、斧、そして硬い岩のことである<sup>12)</sup>  
隷属すれば小さな川となってしまうが  
自由であれば人生は無限の大海である  
土の体に潜んでいるが  
支配することを通じて命は人に知られるのである  
おまえは存在の海から泡のように浮かび上がった  
人生とは、損失のこの館での試練のことである  
未熟であればおまえは土の塊かたまりに過ぎないが  
成熟すればおまえは防ぎようのないつるぎ剣となる

真理のために死のうとする心は  
まずその土の体に命を宿さなければならぬ  
この借り物の天と地を焼き払い  
その灰の中から自分の世界を創り出さねばならぬ  
命の秘められた力を外に出し  
この火花が不滅の輝きを放つようにしなければならぬ  
東洋の大地で太陽のように輝き  
バダクシャーンに再び貴重なルビーを生み出させなければならぬ<sup>13)</sup>  
夜の嘆きを天に使者として送り  
夜空の星と秘密を分ちあわねばならぬ  
今や最後の審判の時——おまえは審判の只中にある  
愚か者よ、何か行動したことがあるのなら、その記録を見せてみよう

### 専制政治

さあ、おまえに「王者とは、都市に入るとこれを破壊し……」の聖句の秘密を教えよう  
列強諸国の支配は、一つの魔法である<sup>14)</sup>  
支配されている者が少しでも眠りから覚めると  
支配者の魔術は再びその者を眠らせる  
マフムード王の魔法のせいで奴隷アヤーズには  
首枷が自分を飾る首飾りに見えてしまうのである<sup>15)</sup>  
イスラエルの民の血は遂にはたぎりたち

12) 「山を穿つ者」とは、ファルハド (Farhād) のこと。美女シーリーン (Shīrīn) の宮殿まで独力で山を切り開いて川を引けばシーリーンを授けるとホスロー (Khusrau) 王に言われ、実行する。波立つ川は白く、乳のように見えるので「乳の河」と言われる。ニザーミー (岡田恵美子・訳)、『ホスローとシーリーン』、平凡社、1977年を参照。

13) バダクシャーンはルビーの産地として有名。ルビーは地中に入った太陽の光によってできると考えられていた。

14) コーラン 27章 34節を参照。

15) マフムード (Mahmūd) はガズナ朝の王 (在位 998-1030)。アヤーズ (Ayāz) はマフムードが愛した奴隷。

モーセのような者が現れてサマリア人の魔法を打ち破る<sup>16)</sup>  
支配者としてふさわしいのはあの比類なき御方のみ  
支配者はあの御方のみ、他の者はみなアーザルの偶像である<sup>17)</sup>  
隷属して自由な本性を汚してはならぬ  
主人を作り続けるならば、おまえはバラモン以上の不信心者である  
西欧の民主主義体制とは、あのいにしへの楽器  
専制君主の曲しか奏でないのである  
民主主義の衣を纏って踊る専制支配の魔物を  
おまえは自由の妖精だと思い込んでいる  
立法議会、改革、特別措置、諸権利……  
西欧の菓は口には甘い、人を眠らせてしまうのである  
議員たちの白熱した議論など——おお、神よ  
資本家たちの見せかけの争いに過ぎない  
美しく、かぐわしいこの蟹気楼を花園だと思い込んでいる  
愚か者よ、おまえは鳥籠を巣だと思い込んでいる

#### 資本と労働

労働者の許に行き、こう伝えよ  
これはヒズルの言葉ではない、世界の声である  
腹黒い資本家によって食べ物にされた者よ  
数世紀にわたって空手形をつかまされてきた者よ  
富を産み出す手に報酬が与えられてきた  
まるで富める者から貧しい者に施しが与えられるかのように  
アラムート砦の魔術師が与えた大麻を  
愚か者よ、おまえは砂糖菓子だと思ってしまった<sup>18)</sup>  
人種、民族、教会、帝国、文明、皮膚の色……  
支配者たちは見事に麻薬を調合したものである  
愚かにもおまえは存在しない神々のために自分を犠牲にした  
酔い痴れておまえは貴重な命を無駄にした  
欺瞞に満ちた計略で資本家は勝利を収め  
素朴なあまり労働者は敗北を喫してしまった  
立て、今や世界の様相は一変した  
東洋でも西洋でもおまえの時代が始まった<sup>19)</sup>

16) コーラン 20 章 85 節以下を参照。原詩では、「イスラエル (=ヤコブ) の血」となっている。

17) 「比類なき御方」、「あの御方」とは神のこと。アーザル(Ādhar)はアブラハムの父で、偶像崇拜者。コーラン 6 章 74 節を参照。

18) 「アラムート (Alamūt) 砦の魔術師」は、イラン北部エルブルズ山中のアラムート砦を拠点にして反セルジューク朝運動を指導した、イスマーイール派の分派ニザール派の初代指導者ハサネ・サッバーフ (Hasan-e Šabbāh, -1124) を指す。弟子に大麻を与えて暗殺者に仕立てていた、という伝説がある。

19) ロシア革命 (1917 年) を念頭に置いている。

意気軒昂であれば大海すら受け入れられぬ  
愚か者よ、いつまで蕾のように裾に露を宿すのか  
民衆覚醒の歌こそ喜びの源である  
アレクサンダー大王やジャムシード王の退屈な物語をいつまで聞くのか<sup>20)</sup>  
新しい太陽が世界の胎内から誕生した  
天よ、沈んだ星を思っていつまで嘆くのか  
人間の天性はあらゆる鎖を断ち切ったのに  
遠い天国を思ってアダムはいつまで涙を流すのか  
治療者たる庭師に春は言う——  
「いつまで花の傷に薬を塗るのか」  
愚かな蛍よ、蠟燭の周りを回るのはやめよ  
自分の本性<sup>なか</sup>にある、光り輝く世界に棲むがよい

#### イスラーム世界

トルコ人やアラブ人の話をこの私に聞かせるのか  
ムスリムが置かれている状況ははっきりと解っている  
三位一体説の子孫たちは、「神の友」アブラハムの遺産を奪い去り  
ヒジャーズの土は、キリスト教会の土台の煉瓦にされてしまった<sup>21)</sup>  
赤い帽子は世界の笑い物となっている  
誇りに溢れていた者たちは今や他人にへつらっている<sup>22)</sup>  
ペルシアは西欧の酒売りから  
杯すら溶かしてしまうほどの強い酒を買っている  
西洋の策謀によってムスリム世界は  
切り刻まれた金のようにになっている  
ムスリムの血は、水のようにただ同然になってしまった  
おまえが動揺するのは、おまえの心が秘密を知らないからである  
ルーミーはこう言った、「古くなった建物に住むには  
——おまえは知らないのか——まずその土台を壊さなければならない」と<sup>23)</sup>  
国を奪われ、ムスリム世界の目が開いた  
愚か者よ、神が授け給うた目でよく見るがよい

20) ジャムシード (Jamshīd) 王は古代イランの伝説上の王。

21) 「三位一体説の子孫たち」とはキリスト教徒のこと。「神の友」アブラハムの遺産とは唯一神の信仰のこと。ヒジャーズは、メッカやメディナのある地域。

22) 「赤い帽子」イランのキズィルバーシュ（トルコ語で「赤い頭」という意味）族を指しているのか、赤い帽子を被った、オスマン・トルコのトルコ人を指しているのか、判然としない。

23) ルーミーの詩句を『精神的マスナヴィー (Mathnavī-e Ma'navī)』より一部改変して引用している。Nicholson, R. A., ed. & tr., *The Mathnavī of Jalālu'd-dīn Rūmī*, 8 vols., London, 1960–1972 の Book IV、詩番号 2350 を参照。ルーミーはイクバルが非常に愛好したペルシア詩人である。

葉を乞うより骨折したままの方がましである  
哀れな蟻よ、ソロモン王の所に陳情に行ってはならぬ<sup>24)</sup>  
輝けるムスリム世界の一致団結によって東洋が解放されるということ  
このことにアジアの人々はまだ気づいていない  
権力争いをやめ、再び信仰の砦に立てこもらなければならぬ  
国家など聖地擁護の結果として得られるものに過ぎぬ  
聖地防衛のためにムスリムは一体とならねばならぬ  
ナイル川のほとりからカシュガルの大地に至るまで  
皮膚の色や血統で人を区別する者は滅亡する  
大天幕のトルコ人であろうと、名門のアラブ人であろうと  
民族性を信仰より重視すれば  
道の埃のようにムスリムは世界から消え去るであろう  
カリフ制の基礎が再び強固なものとなるように  
父祖の心と精神を探し出してくるがよい<sup>25)</sup>  
事の軽重を知らぬ者よ、目を覚ますがよい  
アブー・バクルとアリーに縛られた者よ、目を覚ますがよい<sup>26)</sup>

恋には嘆きが必要であった——しかし、嘆くだけ嘆いた今  
少し心を落ち着けて、嘆きの効き目を見届けよ  
おまえは川が大きく盛り上がるのを見た  
うねる波がどのように鎖となるか、見届けよ<sup>27)</sup>  
イスラームが見た普遍的自由の夢が  
ムスリムよ、今日、実現されるのを見よ  
火蜥蜴にとって自分の灰こそが再生の源である  
死んでも蘇る、この年老いた世界を見よ  
目を見開いて私の言葉の鏡の中に  
到来しつつある時代のおぼろげな姿を見るがよい  
天にはすでに試みられた厄災がもう一つ控えている  
運命に人間の努力が辱められるのを見よ<sup>28)</sup>  
おまえはムスリムである——大志で心を満たし続けるがよい  
「神が約束を違え給うたことはない」の聖句を常に念頭に置くがよい<sup>29)</sup>

24) 軍隊に巢を壊された蟻がソロモン王に軍隊を通さないように訴えた、という伝説に基づいている。

25) カリフ制は1924年3月3日に廃止された(詩集『鈴の音』が出版されたのは1924年9月3日)。

26) スンニー派とシーア派の宗派対立、ムスリムの内部対立を批判している。

27) 西欧文明が自滅するのを見届けよ、ということ。

28) 第二次世界大戦の勃発を予言しているようである。

29) コーラン、3章9節を参照。